

平成27年度
事業報告書



Meitoku
since 1925

学校法人千葉明德学園

目 次

I 法人の概要	1
1. 法人の名称	1
2. 事業所の所在地	1
3. 設置する学校	1
4. 附帯事業	1
5. 姉妹法人	1
6. 学生・生徒・園児の数	1
7. 役員	2
8. 教職員の状況	2
9. 土地建物の状況	3
II 事業の概要	3
1. 学園全体の状況	3
2. 千葉明德短期大学	4
3. 千葉明德高等学校	6
4. 千葉明德中学校	9
5. 千葉明德短期大学附属幼稚園	11
6. 明德本八幡駅保育園	13
7. 明德浜野駅保育園	14
8. 明德やちまた子ども園	16
III 財務の概要	18
1. 過去5年間の消費収支の推移	18
2. 施設設備への投資額の推移	19
3. 借入金の推移	19

I. 法人の概要

1. 法人の名称 学校法人千葉明德学園
2. 事務所の所在地 千葉県千葉市中央区南生実町1-4-12番地
3. 設置する学校
- (1) 千葉明德短期大学保育創造学科
 - (2) 千葉明德中学校
 - (3) 千葉明德高等学校 全日制課程普通科
 - (4) 千葉明德短期大学附属幼稚園
 - (5) 明德やちまたこども園
4. 附帯事業
- (1) 明德本八幡駅保育園（第二種社会福祉事業）
 - (2) 明德浜野駅保育園（第二種社会福祉事業）
5. 姉妹法人 社会福祉法人千葉明德会
明德土気保育園・明德そでの保育園を運営

6. 学生・生徒・園児の数

(平成27年5月1日現在)

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
千葉明德短期大学	150名	300名	244名	1年	132名
				2年	112名
千葉明德高等学校	400名	1,200名	984名	1年	357名
				2年	250名
				3年	377名
千葉明德中学校	120名	360名	147名	1年	44名
				2年	53名
				3年	50名
千葉明德短期大学 附属幼稚園	(3歳児) 100名	310名	274名	3歳児	80名
	(4歳児) 105名			4歳児	93名
	(5歳児) 105名			5歳児	101名
明德本八幡駅保育園		45名	53名	0歳児	9名
				1歳児	24名
				2歳児	20名

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
明德浜野駅保育園		36名	41名	0歳児	6名
				1歳児	7名
				2歳児	5名
				3歳児	9名
				4歳児	7名
				5歳児	7名
明德やちまた こども園		75名	31名	0歳児	3名
				1歳児	6名
				2歳児	4名
				3歳児	14名
				4歳児	4名
				5歳児	0名

7. 役員 (平成27年4月1日現在)

理事長	福中 儀明
副理事長	鈴木 總美
理事	金子 重紀 (千葉明德短期大学学長)
理事	園部 茂 (千葉明德中学校・高等学校校長)
理事	柴田 炤夫
理事	南 金次 (内部監査室長)
理事	福中 裕明 (短期大学アドミッションセンター長)
理事	高浦 芳一 (法人事務局長)
監事	荒木 由光
監事	神子 信行

8. 教職員の状況 (専任教職員数及び平均年齢) (平成28年3月31日現在)

	人員数	平均年齢
短期大学教員	16名	44.8歳
高等学校教員	54名	47.2歳
中学校教員	13名	40.4歳
幼稚園教員	13名	32.3歳
本八幡駅保育園	14名	33.8歳
浜野駅保育園	11名	37.6歳
やちまたこども園	8名	38.8歳
事務職員	22名	43.6歳
合計	151名	39.8歳

(注) 短期大学学長、高等学校校長、法人事務局長、アドミッションセンター長は、理事(役員)であることから前項の役員一覧に記載し、上表の数には含めていない。

9. 土地及び建物の状況

(1) 土地の状況 (平成28年3月31日現在)

(㎡)

	法人部門	千葉明德 短期大学	千葉明德中学 校・高等学校	千葉明德短期大学 附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校地	0	13,668	67,975	3,593	2,871	88,107
その他の土地	472	0	0	0	0	472
合計	472	13,668	67,975	3,593	2,871	88,579

(2) 建物の状況 (平成28年3月31日現在)

(㎡)

	法人部門	千葉明德 短期大学	千葉明德中学 校・高等学校	千葉明德短期大学 附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校舎	0	3,844	14,984	1,496	705	21,029
附属施設	0	0	3,419	0	0	3,419
その他の建物	0	10	0	0	0	10
合計	0	3,854	18,403	1,496	705	24,458

II. 事業の概要

1. 学園全体の状況

学園の財政状況は、教育研究キャッシュフローの低迷に見られるとおり、学園の基本的な収益力が低下している事から運転資金不足、短期借入金に依存している事にある。その原因は、学生・生徒・園児募集の不振にある事は明らかであることから、本年度は平成26年度に策定した経営推進中期計画を根本的に見直し、平成31年度までの5カ年間の経営改善計画をスタートさせ、新たな改革への初年度となった。

このような状況の中で、本年度学園としての最大の前進は、平成27年4月1日に開園した幼保連携型認定こども園と、既存の幼稚園、保育園等の保育施設との連携により総合保育創造組織としての新たな展開ができたことである。

本年度の決算は、当初予算と比し消費収支差額が約1億4,200万円の改善とともに、帰属収支差額にあっては、約1億2,000万円の改善を図ることが出来た。(詳細は「Ⅲ財務の概要」参照)

平成27年度、千葉明德学園は創立90周年を迎え、記念すべき100周年を見据えた10年間のスタートの年であった。

本年度は、今後本学園がこの地で未来永劫揺るぎない存在を確立するために、記念事業等の計画実現に向けた年次計画や財政計画を策定する為に、法人事務局内に「100周年記念実行委員会」を組織し、11月5日、宇宙飛行士の山崎直子氏を迎え、第1回目の「100周年記念事業講演会」を開催した。

各部門における状況は、学園経営の中心である高等学校においては、進学校化目

指し本格的に様々な角度から学校改革を進めた年であり、特に進路実績、部活動実績ともに相当の成果を確認できた年であった。また、学生募集に当たっては、志願者数、入学者数も回復し、中でも近隣中学校からの受験者の増加は、今後の募集活動に大きな展望を抱ける結果であったと思われる。

中学校については、本年度44名の入学者であり運営面、財政面においても非常に厳しい年度であった。次年度入学者数は、新たに実施した適正検査型入試により、受験者数増となり、若干回復したものの、50名の入学者にとどまった。

短期大学においては、本年4月に新設したアドミッションセンターの募集活動により、指定校推薦の獲得、オープンキャンパスでの活動が成果となり、前年比12名増、定員充足率96%となった。

保育部門では、本八幡駅保育園、浜野駅保育園ともに定員を超える園児を常に確保し、各施設における様々な教育活動が実り、安定した状況が順調に推移している。又、平成28年4月に新たに開園した「明德やちまたこども園」は、募集定員55名に対し、28名でスタートする結果となったが、1年間の様々な活動の結果、又地域のニーズに対応することにより、次年度52名の園児を確保した。これは今後、保育総合創造組織として更なる飛躍の要素となる事と思われる。

2. 千葉明德短期大学

本年度は、学生募集を最重要課題とし、学生支援の充実を基本的な方針として運営に取り組んできた。

(1) 学生募集

本年度、独立した組織となったアドミッションセンターが学生募集活動を中心的に行った結果、離職者等再就職訓練生（保育士養成コース）20名を含め、入学者144名（昨年度より12名増、定員充足率96%）、を迎えることができた。入学者増については、指定校推薦の入学者が10名程度増加したことが数字上の要因であると言えるが、オープンキャンパス等において、アドミッションセンタースタッフ、教員とともに学生が多く参加し、日ごろから実習、授業を通して培っている“保育創造”、“体験から学ぶ”という本学の教育理念を高校生に丁寧に伝えていく取り組みを行った成果であると言える。

なお、本年度の学生募集活動を通して、入試制度の改革にも着手し、次年度からは、よりわかりやすい入試を行うとともに、より入学前教育を充実させたいと考えている。

(2) 学生支援

① 教育と保育実践の連携

昨年4月、明德やちまたこども園が開設され、“総合保育創造組織”は、附属幼稚園、明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、及び系列の明德土気保育園、明德そでの保育園となった。本学学生の実習先であることはもちろん、ボランティア、有償研修（アルバイト）等、様々な形で保育現場に入り、学びを深めている。また、同じ敷地内にある附属幼稚園については、改めて連携の在り方について検討を始めることとした。

②カリキュラム改革、教科の連携

将来的なセメスター制導入のために、通年科目を半期科目に分割したり、教科群を再編成する等のカリキュラム改革を実施した。(※適用は、平成28年度入学生から) 現行の教育課程においては、本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」を実現するための鍵となる1年次金曜日の教科目「保育内容演習」、「総合演習」の連携を行った。4月・5月には「保育体験」を、6月には「アクティブ・ラーニング・ウィーク」として、様々な場所での社会体験プログラムを用意した。また、7月には、前期のまとめとして、様々な体験からの学びを発表した。後期にも、専任教員が用意した様々な現場体験のプログラムの中から、学生自身が自分の興味に応じて選択し、様々な体験を重ねた。1月には、1年間のまとめとして、自身の体験したコースの概要や感想を発表会で各自報告した。

2年次後期には、「保育・教職実践演習」、「保育者論」、「こども臨床学」の連携により、2年間の実習についてのまとめのレポートを作成し、発表を行った。更に「保育方法演習」との連携により、2年生全員が「卒業レポート」を作成する取り組みを行い、その成果を2月の「学びの成果発表会」に結実させた。

③教育課程外の取り組みの充実

教育課程外での取り組みとして、卒業生が保育現場に勤務しながら、月に2回程学校に戻り、現場での体験を基に教員と学びを深める「保育臨床研修コース」(研修生制度)を開講している(研修生:6名)。土粘土等を携えて保育現場に遊びを届ける「明德あそぼうカー」の取り組みは、実施園:17園・延べ39回と前年に比べて2倍以上に拡大した。

千葉明德学園90周年記念として、公開講座「めいトーク2015」(子どもについて様々な角度から学ぶ3つの公開講座)を、6月27日、9月5日、11月14日に実施し、延べ151名の参加者を集めた。

また、千葉明德短期大学創立45周年記念企画として、理事長と行く「ネパール幼児教育スタディツアー」を理事長・本学教員・学生2名を含む総勢9名で実施した。

「教員免許状更新講習」は、必修領域:50名、選択領域:6講座で169名の受講者を集め、本年度も継続して行った。

昨年度からスタートした取り組みとしては、千葉市と千葉市内の3短大(千葉経済大学短期大学部、植草学園短期大学、本学)と連携して、下記の講座を実施した。

ア. 幼稚園教諭免許状・保育士資格の併有促進特例措置に対応した特例講座

・保育士資格取得のための特例講座:受講者62名

・幼稚園教諭免許状取得のための特例講座:受講者11名

イ. 「千葉市子育て支援員研修」の「基本研修」(73名)と「現任研修」(36名)の委託を受けて、研修を実施した。

また、行き場のない児童の保護シェルターを運営するNPO法人「子どもセンター帆(ほ)希(まれ)」の事務局業務を引き続き受託している。(事務局は「こども臨床研究所」内に設置)

④まとめ

以上の取り組みを通して、本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」の実現を図り、教育内容の充実、本学の学びの魅力を深めてきた。このことは、一人一人

の学生に対する丁寧な支援を実践することである。その成果として、ここ数年退学者比率は2パーセント台の低い数字を推移し、また、就職決定率も97%の高率を維持していると考えられる。

平成27年度卒業生(45回生)就職状況

平成28年3月31日現在

卒業者数	108人
就職希望者数	100人
就職決定者数	97人
就職決定率	97.0%

※就職を希望しなかった卒業生8名の内、3名は科目等履修生として資格取得を目指し、学び直している。2名はワーキングホリデーを希望、2名はアルバイトを行っている。1名(留年生)については在学中に就職している。

(就職先内訳)

就職先種別	人数	比率
幼稚園	19人	19.6%
認定こども園	6人	6.2%
保育所	42人	43.3%
福祉施設(保育所を除く)	19人	19.6%
認可外保育施設・学童保育	3人	3.1%
一般企業等	8人	8.2%

学生の就職先は、上記のように、幼稚園への就職が少なく、保育所への就職が多い傾向が続いているが、その要因としては、保育所の求人募集数が幼稚園の約1.5倍であること、保育所の保育士不足が盛んに言われている中、学生の意識も保育所への就職意識が高いと考えられる。

3. 千葉明德高等学校

平成27年度は、学校改革を進める第一歩として完全学校6日制にし、中学1年から高校3年まで全学年が完全学校6日制になった年であった。また、昨年度入学生からスタートした本格的改革(大学進学に特化したカリキュラム)の学年が2学年となり、学校の雰囲気も着実に『新しい進学校』に近づいた一年でもあった。

(1)教育活動

1・2年生を中心に学校全体の雰囲気・環境を進学校化することを意識して以下の学習システムプログラムの構築に取り組んだ。

- ①授業の理解度を確認し受験学力の育成につなげられるようにするための朝テスト・知識を総合的に使う力を養うための時事問題の要約・読書指導などの朝学習を行った。また、確認テスト不合格者に対しては放課後補習を行い、学習習慣の定着と学

力の向上を図った。

- ②夏期・冬期・春期の平常授業終了後に休業中などを利用して合計4週間のセミナーを全員参加で行った。なお、進学コース・一貫コースは合計5週間、特進コースは合計6週間のセミナーを全員参加で実施した。
- ③語学研修のプログラムとして、英語集中ゼミとして希望者を対象に夏季休業中の1週間を利用して少人数クラスの「ネイティブセミナー」を実施した。その後夏季休業中に1年生の特進コースは全員、その他のコースは希望者で福島にあるプリティッシュヒルズという宿泊研修施設で「国内語学研修」を実施した。これらのプログラムの集大成が、2年生で実施する海外研修旅行や姉妹校へのホームステイなどであり、各々の取り組みの系統性を重視しながら実施した。
- ④学校行事に関しては、一昨年度からの方針に沿って進学校にふさわしい内容のものに見直すと共に、伝統化出来るようにすることを主眼に置いて行った。
- ⑤生活指導については、学校の雰囲気をつくる重要な要素と捉えしっかり指導してきた。特に1・2年生は制服も替わり、着こなし等も細かく指導し、どの学年も、だらしない着こなしや頭髪の乱れは皆無に近い状況であった。また、基本的な生活習慣も身につけており、今年度も退学者を1%未満にすることが出来た。

(2)進路実績(旧課程)

平成27年度は旧コース制377名の卒業生を送り出した。進路状況は下記の通りである。

進路先	実数	構成率(%)
4年制大学	203名	53.8
短期大学	21名	5.6
専門学校	82名	21.8
就職	17名	4.5
その他(浪人)	54名	14.3

【主要大学の合格実績】

千葉大1名 新潟大1名 青山学院大2名 立教大9名 明治大4名 法政大8名
東京理科大2名 中央大7名 立命館大1名 成蹊大1名 明治学院大1名
獨協大2名 東洋大15名 日本大15名 駒澤大14名 専修大5名 順天堂大1名
共立女子大4名 東京農業大10名 東邦大7名 東京都市大1名 東海大2名
神田外語大5名 文教大2名 帝京大13名 武蔵野大4名

国公立大学は千葉大、新潟大の2名、GMARCHレベル(立命大・理科大含む)は32名、私立中堅大学(日東駒専)は49名、昨年度に比べて合格者数は増加している。いずれも一般受験によるもので、生徒の学力は着実に伸びている。これは教員の進学指導が向上しているとも考えられる。また、昨年度までになかった大学受験傾向として、浪人生の数が54名と比較的多くなっている。その中には一定レベル(日東駒専等)の大学へは合格したものの、さらに上位の大学に進学しようとして浪人したのも相当数いる。入学時の偏差値を上げ、朝学習や特別セミナーなどの受験対策を導入してきた今年度の1年生の進学実績がどこまで飛躍的に伸ばせるかが今後の生徒募集にとって重要であ

る。難関国公立大を初め、千葉大や早慶へのコンスタントな現役合格者数増を目標とすると共に、今まで進学実績を頼っていた特進や S クラスだけでなく学校総体として、一人ひとりの進路希望の実現に向けた指導体制を確立し、外部からの評価を定着させていきたい。

(3)部活動(主な戦績)

3年のスポーツ科学コース、2年のアスリート進学コースを中心とした部活動成績について、成果をあげることができた。主な戦績は以下の通りである。

野球部	秋季千葉県高等学校野球大会準優勝
サッカー部	男子 千葉県高等学校総合体育大会 3位 女子 千葉県女子U-18 サッカーリーグ 優勝 全国選抜高校女子サッカー大会出場
チアリーディング部	アジアインターナショナルオープン・チャンピオンシップ 5位 関東チアリーディング選手権大会 準優勝 JAPANCUP 2015 3位
柔道部	関東高等学校柔道選手権大会 団体の部出場 千葉県高等学校体育大会 団体の部 3位 千葉県新人柔道大会団体の部 3位、個人の部準優勝 1名(78kg 超級)、3位 2名(70kg 級・78kg 超級)
剣道部	国民体育大会女子個人の部 1名出場 関東高等学校剣道大会出場 女子個人の部・女子団体の部
水泳部	インターハイ 2名出場 千葉県高等学校総合体育大会・関東高等学校選手権大会出場
陸上競技部	関東高等学校陸上競技大会出場
ダンス部	全国高等学校ダンスドリル選手権大会 関東大会 2位
コーラス部	千葉県合唱アンサンブルコンテスト 高等学校の部 銅賞

(4)生徒募集

26年度のコース改編により大きく減少した志願者数も、広報活動の努力と新しい学校イメージの浸透により着実に回復し、28年度は26年度比で261名の増加となった。中でも近隣中学校からの志願者数が大きく伸び、推薦基準等の入試要項が地元のニーズに合致していると実感することができた。

一方、公立高校の入試制度変更の影響もあり併願者の歩留まりが著しく低下し、入学者数は目標値に届かなかった。次年度に向けてはさらなる志願者数の増加と、専願希望者を増やすべく、さまざまな工夫を凝らして募集活動を展開していく。

今年度末はいよいよ、新コース制での進学実績が明らかになる。「新しい進学校」として、来年度以降につながる生徒募集を繰り広げたい。

(5)ICT化に向けた取り組みについて

来年度からの年次計画に沿ったICT導入の準備の年と位置づけ、以下の取り組みを実施した。

- ① ITC教育推進委員会を立ち上げ、導入計画の具体化、教職職員内の研修計画を立案し実施していった。

②各種研修会を実施した。

ア. ロイロノート・内田洋行学習会

イ. 講演学習会：袖ヶ浦高校情報コミュニケーション学科 学科長永野先生

ウ. 春休み研修会：クラッシー、ベネッセ等

4. 千葉明德中学校

平成27年度は、千葉明德中学校が開校して5年目となり、新入生44名を受け入れて、148名（中1：44名、中2：54名、中3：50名）でスタートした。これまでどおり、本校の教育理念である「明明徳」を教育の中心にすえて、総合学習「土と生命の学習」「課題研究論文」や、各教科、学校行事等のカリキュラムづくりを進めてきた。また、1期生が完成課程（5・6年）に進み、大学進学にむけての進路指導・受験指導等を含めた、6年間トータルの教育の全体像が具体化されてきた。併せて、学校行事やさまざまな取り組みを振り返り、精選した年度でもあった。

また、平成27年度は、文科省レベルでも2020年にむけた大学入試改革の議論が進められてきた。その中で、「21世紀スキル」や「アクティブ・ラーニング」という言葉が多く取り沙汰されてきたが、この点では、本中高が開校当初から進めてきた「まとめて書いて発表する」取り組みが、こうした文科省レベルでの改革と軌を一にするものであった。そしてさらに、これまでの本中高の取り組みが、それに先だって進的な実践を進めてきたことを確信しつつ、こうした方向性での取り組みについて、以下で振り返る。

(1)教育活動

①「発掘課程(1・2年)」について

発掘課程（1・2年）については、これまでの積み重ねられた指導実績から、その目標・内容はさらに洗練されつつある。入学当初の発掘課程の充実こそが、6カ年一貫教育の礎となるもので、このステージの完成が、本中高の教育を決定づけるといって過言でない。

まず、これまでの「ノーチャイム制」や「完全復習プログラム」、また日誌の取り組みは、生活習慣・学習習慣をつけるための土台となる。これらの取り組みは、生徒・教員において、しっかりと定着したものとなっており、その成果はじゅうぶんに発揮されている。

また、発掘課程でのカリキュラムの中心に位置づけられる総合学習「土と生命の学習」は、本校独自のカリキュラムと特長づけられ、これを中心にして、教科や学校行事のさまざまな場面で「まとめて書いて発表する」という取り組みを実践している。つまり、「1分間スピーチ」、「〇〇新聞」など、学んだことや考えをアウトプットする取り組みである。

アクティブ・ラーニングとしてのこうした「まとめて書いて発表する」取り組みは、開校当時から実践しているもので、本中高の文化になりつつある。

②「磨き課程(3・4年)」について

磨き課程（3・4年）は6カ年の中心に位置づけられているが、中学校と高校が制度上、また場所の上でも分断されていることもあり、なかなかその特長の発揮ができない面がある。

3年次の総合学習「課題研究論文」の取り組みは、これまで3期生までの指導のなかで、指導の体系化と内容の充実といった面では大きな成果が挙げられていると言える。年度末の論文の作成と、口頭によるプレゼンテーションは、本校の「まとめて書いて発表する」の成果が大いに発揮される場面であり、塾など、外部からも高い評価を受けている。

また4年次より高校課程に入るが、この段階からは将来を見据え、自分の生き方を探究する学習にはいる。「自分を識る学習」は、そのきっかけと位置づけられ、希望進路や生き方を明確にしていくきっかけとなる。

ただ最初に指摘したとおり、3・4年をつなぐ一貫したものがなかなか見えづらい点は課題である。平成27年度は、3年1学期末で、中学校課程認定試験を位置づけ、学習内容としては、3年2学期から高校課程に入るようにカリキュラムを明確化した。その意味で、高校課程の教科学習の学びを通して、3・4年のつながりを確立していくことが求められる。

③「完成課程(5・6年)」について

今年度は1期生が5年生となり、いよいよ進路を実現させるための進学指導や大学受験指導の完成が課題となった。1期生(5年生)の担任・教科担当の努力により、こうした取り組みについて、現段階では順調な推移をみせている。今年度は、進路面談などを複数回実施し、生徒の学力・適性から、志望校を確定する段階に入った。結果については、1年後の進路実現に期待したい。

(2)生徒の生活全般に関する状況

①生活指導面

本校の教育の特長である「きめ細かい指導」により、一人一人の生徒に目を配る体制は整ってきた。入学生の状況を見ると心身の健康が心配される生徒もいることから、健康相談やカウンセリング体制のより一層の充実を図ってきた。

②学校行事

生徒の日常の学習への取り組みは大変活発であるといえるが、学校行事などは改めて見直す必要があると考え、文化祭の内容などを精選してきた。学習への取り組みが、学校行事への取り組みで振り回されるところも見られるので、次年度はさらなる見直しが求められる。

③学力差への対応

年々、とくに学年が進行するにつれて、学力差への対応が大きな課題となっている。習熟度別授業等の対応を推し進めているが、よりきめ細かい指導が求められ、まだ充分に対応がなされているとは言えない。また、今年度より、中3の1学期末の期末考査を「中学課程認定試験」と位置づけ、これを一つの区切りと位置づけて学力を測り、それ以降は、高校課程の学習に入るということを明確に打ち出した。これによって、中学課程の学習内容の確認がなされるとともに、先取り学習が明確になった。

(3)生徒募集に関する状況

《H28年度入試の結果》

・第1志望入試(12/1(火)実施)

出願者36名(+8),受験者36名(+8),合格者30名(+4) 入学者28名(+2)

・第1回一般入試(1/20(水)実施)

出願者31名(+0) 受験者31名(+3) 合格者26名(+0) 入学者13名(+1)

・第2回一般入試(1/22(金)実施)

出願者23名(-14) 受験者14名(-3) 合格者9名(-6) 入学者4名(+1)

・適性検査型入試(1/24(日)実施)

出願者50名 受験者50名 合格者45名 入学者2名

・第3回一般入試(2/6(土)実施)

出願者6名(-31) 受験者5名(+3) 合格者3名(-1) 入学者3名(+2)

・二次入試(2/13(土)実施)

出願者0名(-2) 受験者0名(-1) 合格者0名(-1) 入学者0名(-1)

計出願者146名(-30) 受験者136名(+50) 合格者113名(+45) 入学者50名(+6)

今年度は、適性検査型入試をはじめて実施した。適性検査型は、公立中高一貫校で実施している入試であるが、現在進められている大学入試改革の中で、思考力型入試として、世間では高く評価されている。また、適性検査型は、本校が目指す「まとめて書いて発表する」教育に適合するものであることから、導入に踏み切った経緯がある。

結果として、稲毛中受験者を併願先として多くの受験者を取り入れることができ、受験者数の大幅増につながった。ただし、入学者数にはなかなか結びつかなかった。これについては、本校が公立中の二番煎じとして甘んじることなく、公立中より充実した独自の教育内容を確立するなかで、教育内容をアピールしていくことが求められる。

また第2回、第3回一般入試での出願者数の大幅減については、これまで1回の受験料(20,000円)で複数回受験を可としていたが、今年度は、2回目以降は受験料(10,000円)としたことによる。

5. 千葉明德短期大学附属幼稚園

(1)運営方針に対する成果について

27年度の園運営において、「園児数の増加」と「保育の充実」の2つが大きな課題であった。

まず「園児数の増加」について、27年度実績においては、新入園児数は84名と前年度よりも13名の減少となった。これは27年度だけではなく、ここ数年来、減少傾向が続いている。仕事を持つ母親が増加し保育園需要が高まっている現状を踏まえると、園児数を増加させるためには、預かり保育の充実が必要となる。27年度は預かり時間を18時30分までとし開園時間を10時間30分と拡大するとともに、受け入れ人数も25名と拡大した。

一方で「保育の充実」については、確かな手応えを得た27年度となった。それは子

どもたちの姿や、保育に関わる保育者の姿勢に表れている。保育者の指示に従うのではなく、子どもたちが自分で考え、行動する姿が多く見られた。また、教育課程や行事に際し、単に前例に従うのではなく、子どもたちの現状と向き合いながら一から創り上げる保育者の姿も見られた。

園の職員体制においては、27年度からクラス枠に捉われないフリーの職員を各学年に配置し、クラス担任と連携しながら複数の目で子どもを育てる体制へと移行したことで、子どもに細やかに関わり、子どもの持つ多様な面を引き出すことができた。

(2)教育目標と成果について

本園の教育目標は「興味・関心を持ち、自分で考えて取り組み、自身の力で解決できる子ども」である。明德の豊かな自然の中で仲間たちとともに過ごす体験を積み重ね、子どもたちは着実に育っている。数多くの新たな出会いに触れた時、子どもたちは心が揺り動かされ、自身の中に生まれる探求心をバネとして、試行錯誤を繰り返しながら、さまざまな事柄に対して自らの意志で取り組む子どもへと成長する。

「子ども」を中心に置いた本園の教育理念に対する理解と支持を在園児保護者から得ている。それは在園児保護者から届く声や、行事ごとに行う保護者アンケートから伺うことができた。また、園庭開放や園見学などで園を訪れ、子どもたちの姿を見た未就園児保護者から「伸び伸びと遊び、育つ明德の子どもたち」を称賛する声も頂いた。

(3)募集活動と成果について

幼稚園においては通園範囲が近隣地域に限られることから、園庭開放や行事への地域参加の実施など、地域に開かれた幼稚園を目指す取り組みを27年度より開始した。

また、本園保育の魅力を保護者に伝えることで、保護者の目を本園に引き寄せることができることを踏まえ、保育の姿を外に向けて積極的に発信することを方針として掲げた。その一環として27年度は日々の保育の様子をホームページに掲載し発信することに取り組んだ。また、27年度途中から園見学や園庭開放などで来園された保護者に葉書で案内する等、継続的につながる取り組みを行った。年度途中から開始したこれらの取り組みの成果は、28年度の園児募集に表れることとなる。28年度もさらに園の外に発信する取り組みを継続する。

(4)新たに実施した取り組み等とその成果について

女性の社会進出などを背景に、保護者の保育園志向が強まる中、預かり保育への要望が高まっている。事実、入園を検討する保護者からは、預かり保育への要望の声が頻繁に聞かれる。これを踏まえ、27年度は預かり時間を保育前後で長時間化し、預かり定員も25名と拡大した。保護者からは「働きやすい環境が用意されて良かった」との声も挙がり、支持を得た。

預かり保育の充実は入園募集対策となるだけでなく、子育てに苦慮する家庭への子育て支援の一環ともなることも踏まえ、28年度も預かり時間、定員ともに拡大することとする。

また、子育て支援の一環として、28年度6月より2歳児保育を開始する。

6. 明德本八幡駅保育園

(1) 保育園運営方針に対する成果について

①子ども子育て支援新制度が始まり、保育園重要事項説明書を提示し保護者へ本園について説明をし、入園にあたっての同意を得ることが必須となった。同意書の回収はスムーズに進み、スタートできた。

年度中、2歳児保護者の転勤による転出が続いたため、下半期に0歳児（定員9名）の受け入れ人数を当初予定の10名から11名へと変更し受け入れた。そのことは平成28年度のスタートの負担を軽減することにもつながり、新入園児・職員共に落ち着いて新年度を迎えることができた。

②補助金交付対象となる特別保育事業、一時預かり事業、体調不良児対応型保育事業を例年通り実施するとともに、障害児受け入れによる障害児保育促進事業にも取り組んだ。

(2) 保育・教育目標と成果について

①保育士自身の学びを深めることを目指し、各種研修受講に加えて園全体で保育所保育指針の読み直しを通年で行ってきた。それにより、年齢ごとの発達をより細かく捉え、遊びの素材や道具によって関わりの質と量が異なることに着目して保育に反映させてきた。

②子どもにとって保育士とのよりよい関わり、環境を提供することを目的に、1・2歳児合同クラスにおける小グループ制を採用した。同クラスに年上、年下の園児がいることにより、年長の子どもに憧れる気持ちや年下の子どもを思いやる気持ちが、低年齢児ながらも育っている。また、語彙数の豊富さ、発想力の豊かさにもその成果が表れている。

③散歩時には、避難車に頼らず自身でしっかり歩くことを継続してきた。そのことにより、体調不良に伴う欠席の減少、避難訓練時の時間短縮に繋がった。子どもの歩幅が進むため、自然物への視線、近隣住民との関わりが広がるなど、感性の育ちにも大きく影響している。

④平成27年度より、食具の見直しを順次していくこととし、第一に、開園当初より使用していたスプーンをサイズの大きいものに入れ替えた。子どもの姿勢、指先の動きから腕の動きといった一連の動作に好結果が見られている。

⑤調理師と連携し、食材に触れる、見る、簡単な調理を行い、食育活動に取り組んだ。

(3) 募集活動と成果について

①地域子育て支援「ポップスマイル」を週二回（実施回数77回、参加人数//555組）に増設し、昨年よりも2倍近くの参加数を集めることができた。在園児との交流も組み込んだことで、入園申請書希望欄に本園を第一希望として挙げたという声が多く聞かれるようになった。

- ②園見学以前に「ポップスマイル」への参加を促すことで、保育園をより知ってもらうことができ、入園希望者増にも繋がっている。
- ③見学者にはアンケートをとり、ニーズがどの点にあるのかを知るようにしてきた。今後も引き続き行っていく。

＜保育園見学者数、合計（ ）内は入園者数＞

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
26年度	6	2	9	8	7	6	24	24	10	3	4	14	113 (21)
27年度	7	10	10	10	5	23	21	18	9	2	9	10	128 (15)

(4)新たに実施した取り組みとその成果について

- ①乳児学習会の実施…保育士の学びの場として、年5回、18時30分からほっとステーション親子を使用し学習会を開催した。他園保育士の参加も認め、実際に市川市、松戸市、江戸川区の他園保育士が参加した。そのことにより保育士同士の情報交換の場ともなり、若い世代の多い本園職員は大いに刺激を受け、意識向上にも繋がった。
- ②何事も「保育の見える化」を念頭に取り組んできた。本園の保育を積極的に公開し、ポップスマイル→園見学→ポップスマイルの再参加という流れを作れ、ポップスマイルのリピーター増加にも繋がられた。
- ③JRの耐震工事に伴い保育園の看板撤去を余儀なくされた。そこで、看板のレイアウト変更（保育園オリジナルキャラクターである汽車を加えたもの）及び掲示位置の変更（保育園が入っているシャポー管理棟出入口正面の柱へ設置）を要望し実現した。結果的に、以前より印象深い掲示内容かつ人の目につきやすい位置への掲示と繋がることができた。

7. 明德浜野駅保育園

(1)保育園運営について

昨年度の年間平均園児数が124%であったため、今年度は120%未満に抑えなければならないことから、下記の月別在籍数のように転居児の補充を行なわない等の対応を経て平均111%の入園数に至り、定員変更等の措置を取らずに済む数字となった。

運営面では、運営費の当初見込み額よりも若干減少したが、大きな影響はなく安定した保育園運営を行なうことができた。

年度末に保護者アンケートを実施し、その結果を踏まえて保育園運営委員会を行ない、保護者からの要望等に丁寧に応えていった。また、食物アレルギーへの対応について千葉県保育所嘱託医部会及び千葉市保育課からの指導により、「食物アレルギー対応マニュアル」の変更を受けて、次年度より土曜の給食提供をお弁当の持参へと変更することとした。このことについて保護者には、千葉市からの文書を配布すると共に、運営委員会後改めて園の今後の対応としておたよりを発行し、土曜保育を利用する家庭には個別に詳細説明を行ない、了承を得ている。

月別在籍数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
在籍	41	41	41	42	41	41	39	39	39	39	39	39

年齢別在籍数（3月）

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
定数	6	6	6	6	6	6	36
在籍	6	6	5	8	7	7	39

(2) 保育目標と成果について

保育目標である《きらきら輝く子ども》を達成するために、本園がイメージする保育のあり方である【大きな実家】の実現をめざして、職員が連携をとって保育を行なった。千葉県保育課主催の保育内容現場研修の対象施設になったこともあり、「大きな実家とは？」というイメージを根本から職員全員で話し合い、フローチャート化することにより、イメージの共有をはかることができ、実際の保育の基礎となってきた。

昨年度に園内研修で行なっていたエピソード記述を、今年度はひとりひとりのエピソードをひろい《子育てわかちあいの記録》として、年4回「小さなエピソードと保育者の思い」を記入したものを保護者に開示し、コメントをもらって評価反省をするようにしていった。この記録に全職員が目を通すことにより、全ての園児を理解するということに繋げていき、大きな実家の実現に一步步近づいていると考える。

(3) 募集活動と成果について

市の認可園としては、直接的な園児募集はできないが、入園に対する相談の問い合わせや見学者などに丁寧な対応を心がけることで、入園申請者へと繋がっている。次年度も入園希望者が多く、4月当初より0歳児の定員が充足され待機児童も多い。特に1歳児は育児休暇明けでの申請が多く、H27年度の卒園児の兄弟関係であっても入園できず、他園を利用することとなった。

4月以降の途中入園を希望する場合、兄弟関係の第2子であっても入園できず、他園と併用する家庭もあった。待機児童・入園希望者共に多く、千葉県子ども家庭課で「明德への途中入園希望の場合は第6希望位まで記入してほしい」と言われ、比較的入りやすい4月の入園を選択したという保護者の言葉からも入園しづらいことが伺われる。

(4) 新たに行なった取り組みについて

① 子育てわかちあいの記録

前述の2でも触れたように《子育てわかちあいの記録》を取り入れることで、保護者との相互理解にも繋がっている。回数を重ねる毎に楽しみにしているという声も増え、保育者の見方とまた違った保護者ならではの子どもへの理解を知ることでもでき、保育をする上で貴重な記録となっている。

② 小規模保育園視察の受け入れ

千葉市民間保育園協議会の主任保育士会主催による「小規模保育園の工夫と実践」をテーマに、主任保育士の小規模保育園への視察受け入れを行なった。前述2の保育内容現場研修の受け入れも合わせて行なったことで、保育の見直しをするきっかけとなった。また、本園の保育の工夫及び実践を他園の保育者に実際に見てもらい、保育内

容や環境構成等に貴重な意見をいただくと共に、他園の現状を知る良い機会となった。

③バス遠足の実施を年2回に

昨年度の保育園運営委員会で保護者からの意見としてあがった「3歳以上児の遠足を年2回にしてほしい。」という意見を反映させ、今年度より春にも学園バスを利用した遠足を実施した。数か所の施設を十分な下見をした上で実施し、園児も保護者も満足のできる結果となった。

(5)その他

①災害対策に伴う防災用品の補充

災害時の避難に必要な職員用のヘルメットが揃っていなかったため、人数分の補充を行なった。選ぶ際にコンパクトに折りたたむことのできる物を選び、保育室に設置しても場所を取らないようにしていった。

②障害児保育

障害児認定された園児に対し、千葉市の規定により保育士1名を補充し、保護者及び関係機関と連携を持ちながら保育を行なった。千葉市による障害児保育の巡回指導でも、適切な保育が行なわれていると評価され、就学に向けたアドバイスをいただき保育を行なってきた。その結果、安定して園生活を送ることができ、成長発達も著しく、普通学級へ入学することが決定した。

8. 明德やちまたこども園

(1)運営方針に対する成果について

平成27年4月1日園児28名で開園した。園児数の内訳は、0歳児2名、1歳児6名、2歳児4名、3歳児13名、4歳児3名、5歳児0名であった。

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児		4歳児	
3号			1号	2号	1号	2号
2名	6名	4名	8名	5名	2名	1名

このこども達の保育を担う保育者を規準通りに配置した上で、0歳児(もも組)1歳児(すみれ組)を1つのチームとし職員5名で、2歳児(ゆり組)4名を1つのクラスとし職員2名で、3歳児(さくら組)4歳児(ふじ組)16名を合同で職員4名で、全体を3つのチームに分けて保育実践を展開した。

2号・3号のこども達は、朝7時から夜18時までの保育時間を、4つの班のシフト制を組んで実践し、1号こども達は、朝9時から登園し、午後2時に降園する“幼保連携型認定こども園”として運営した。

また、広い園庭は、こども達にとって安心した外遊びを楽しめる。0歳児から4歳児まで、異年齢が入り混じり一緒に群れて遊ぶ1日は、外遊びが出来ない乳児の“育ち”も豊かにしてくれている。

このようなこども達の遊び、育つ姿は、0歳児4名、1歳児2名、2歳児2名、3歳児2名の新たな園児の入園につながり、後半は38名の園児で運営することとなった。

(2)教育目標と成果について

学事日程も年間の予定も立てず、4月の開園を迎えた。しかし、行事が欲しいという保護者の声もあり、八街の地域性を生かす行事を計画した。

農家の年間作業予定表に合わせて、6月ににんじんを収穫し“にんじんまつり”、7月に収穫したジャガイモ・トウモロコシを食べながら“夕べの集い”、9月は多古米を頂戴し“新米まつり”と、こども、保護者、職員が“旬”の食材をいただきながら、交流する機会を創って来た。

年度末の2月には、各クラス毎で、こども達の“育ち”を語り合う「成長を語る会」を催し、保護者と共に、育ちを共有する機会を持った。

(3)募集活動と成果について

9月から、毎週木曜日の午前10時から見学・案内を直接園長が対応するとともに、HPにアップし、訪問する親子に対応した結果、入園の希望を決めて頂いた。1号こどもは、5歳児1名、4歳児2名、3歳児9名が入園、3歳児の9名は、新入園児の核となり、2年目は52名でスタートすることになる。

また、0歳児は3名の枠を空けてのスタートであるが、すでに問い合わせが始まっている。3歳児の1号こどもの新入園児を10名程度確保する事が安定した園児数維持につながっていく。

(4)その他

こども園化に向けた準備で、調理室、乳児室、幼児トイレの改修を最優先に、開園を迎えたが、数か所の雨漏り、電力不足による電源確保の工事等、緊急を要する工事が発生した。園舎、園庭の全体把握をしてからの計画的な改修工事が課題である。

Ⅲ. 財務の概要

1. 過去5年間の消費収支の推移

(単位：千円)

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
消費 収入	学生生徒納付金	951,437	976,323	1,040,209	941,221	971,065
	手数料	35,657	32,737	20,890	24,714	27,200
	寄付金	7,234	17,202	7,402	108,593	13,845
	補助金	558,485	750,400	818,775	801,492	871,832
	資産運用収入	6,699	5,701	7,200	6,679	7,124
	資産売却収入	0	0	0	0	0
	事業収入	150,746	10,590	10,508	11,747	46,374
	雑収入	119,356	100,357	176,101	132,333	116,325
	帰属収入合計	1,829,616	1,893,313	2,081,087	2,026,782	2,053,767
	基本金組入額	△ 137,343	△ 167,816	△ 205,703	△ 417,460	△ 213,271
消費収入合計	1,692,273	1,725,497	1,875,383	1,609,322	1,840,496	
消費 支出	人件費	1,345,417	1,378,174	1,535,933	1,418,862	1,455,929
	教育研究費	312,602	304,605	329,395	327,714	344,302
	管理経費	153,534	161,742	165,766	155,625	176,209
	借入金等利息	28,862	28,924	27,678	26,243	24,139
	資産処分差額	1,358	48	1,149	1,260	1
	徴収不能額	37	187	0	2,172	0
	消費支出合計	1,841,813	1,873,682	2,059,922	1,931,879	2,000,582
消費収支差額	△ 149,539	△ 148,185	△ 184,539	△ 322,556	△ 160,086	
帰属収支差額	△ 12,196	19,630	21,164	94,903	53,184	

(注) ①金額は、すべての項目について千円未満は切り捨てて記載しており、合計額が一致しない場合もある。以下の表においても同じ。

②平成27年度会計基準の変更により、旧消費収支計算書が、事業活動収支計算書と変更になったが、経年比較の為、従来の消費収支計算書の表示形式とした。

平成27年度決算の基本金組入前当年度収支差額は(旧：帰属収支差額)は、事業活動収入(旧：帰属収入)20億5,376万7千円に対し、事業活動支出(旧：消費支出)は、20億58万2千円となり、5,318万4千円の収入超過となった。

また、基本金組入後の事業活動収入は、18億4,049万6千円となり、事業活動支出との差額である消費収支差額は、1億6,008万6千円の支出超過となった。

基本金組入前当年度収支差額(旧：帰属収支差額)は、平成24年度から4期連続の収入超過となった。

科目別に分析すると、収入部門では、補助金収入、事業収入の増加、支出部門では、人件費及び経費が増加しているが、これは平成27年4月に開園したやちまたこども園に関する年間の収入及び経費を計上によるものである。

2. 施設・設備への投資額の推移

(単位：千円)

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
施設関係支出	77,548	133,951	65,978	117,028	44,827
設備関係支出	36,191	26,800	42,066	13,517	15,204
合計	113,740	160,751	108,045	130,545	60,031

平成27年度の主な施設関係支出は、建物支出において、短期大学保健室設置工事、倉庫の拡張工事、高等学校2号館特別教室棟の天井改修工事、学内タブレット端末用無線LANネットワーク工事、火災報知器受信機交換、中学校校舎における防火扉設置工事、やちまたこども園における水道工事、屋根補修等の不具合箇所是正工事を行った。又構築物支出においては、短期大学における電灯、及び動力ケーブルの引替工事、グラウンド人工芝敷設工事、野球場防球ネット交換工事等により教育環境の改善整備を行った。

設備関係支出は、教育研究用機器備品として、短期大学講堂整備を中心に常設液晶プロジェクター、テーブル及び椅子、メモ台付き椅子等の整備を行った。又、3教室の液晶プロジェクターの設置を行った。高等学校においては、理科備品として超音波洗浄器、卓上人工気象器、その他備品として生徒用ロッカー、1号館東側のシューズロッカーの入替、幼稚園においては、ミーティングルームの整備を中心に行い教育環境の整備を行った。

3. 借入金の推移

(単位：千円)

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
長期借入金	796,238	754,413	678,431	588,200	503,101
短期借入金	431,209	437,825	474,973	510,231	485,099
合計	1,227,448	1,192,238	1,153,405	1,098,431	988,200

(注) 各年度とも3月31日現在の残高を記載している。

長期借入金は、前年同様に新規の借入は、前年比8,509万9千円の減少となった。短期借入金の期中運転資金は、借入7億5,000万円に対して、返済7億7,000千円となり、2,000万円の減少となった。

その結果、返済期限が1年以内の長期借入金の減少を含めて、長期及び短期の借入金残高合計は、前年比、1億1,023万1千円の減少し、9億8,820万円となった。

